

2026 年度 特待入試

第 4 回

国 語

[注意事項]

- 1 問題は一から四までです。
- 2 時間は 50 分です。
- 3 下敷きおよび電算機つきの時計の使用を禁止します。
- 4 解答は、濃くはっきりと書くようにしてください。
- 5 開始の合図があるまで問題用紙を開かず、手を触れないでください。
- 6 試験中はよそ見をせず、きちんとした態度で行ってください。
- 7 何か物を落としたら、黙って手をあげてください。
- 8 他の受験生に迷惑となるような行為をしないでください。

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「ぼく（桜田蓮）^{さくらだ れん}」の通う宝田スイミングスクール（TSS）には、水泳選手を目指す特訓生クラスがある。年に一度の特訓生の検定に落ちた「ぼく」は、市民プールでも練習しようと思かけたところ、「すすい川原クラブ（スイカ）^{かわはら}」の案内をたまたま見かけて申し込むことにした。インストラクターの春田さん（春さん）^{はる}の指導を受けるうちにタイムも伸びてきて、TSSのコーチから、TSS杯（二位以内に入ると本選に出場でき、特訓生にすいせんされる可能性もある）の県予選に出ることをすすめられ、出場することにした。

ぴりりと引きしまった空気が会場をつつんでいる。

TSS杯の県予選が始まった。まずは自由形の選考、そのつぎが平泳ぎだ。

きんちょうで奥歯がカチカチ音をたてる。

少しでも気もちを落ちつけようと、くるくる足首を回した。

前より筋がよくのびて、大きく回る。

春さんに習ったストレッチを毎日かかさずやったおかげだな。

「がんばれよ」っててれくさそうにいう陽太と、「運ならきつとだいじょうぶ」って丸い目を見開く海音の顔が、ふと頭にうかんだ。

午前中、スイカの練習のあと、そういつて送りだしてくれた。

春さんはだまって A うなずいた。

それを思い出したら、体を取りまいていたきんちょうが和らいで、むだな力がすーとぬけた。

きのう51秒が出たんだもの。だいじょうぶ！

自分にいい聞かせて、ぼくはゆっくりひとつうなずいた。

あっという間にぼくの出番が回ってきた。

水に入り、一度深くもぐる。

むねはドキドキするけど、ドキドキに合わせてパワーがわきでてくるみたい。スタート台に立つ。

ピッという合図で、水へとびこんだ。

呼吸のしかたも、目線の位置も、プルとキックと呼吸のタイミングも、もうなにも考えなかった。

ただただ水の中を進んでいく。

らっこ浮きしているときみたいに体が軽い。

くるりと壁の前でターンして、ひたすらに泳いだ。

指先がプールの壁をとらえたざらっとした感触で、五十メートル泳ぎおえたことに気がついた。プールサイドには一コースにひとりずつ審判しんぱんコーチがいて、タイムを計ってくれている。

「50秒35。がんばったね」

ぼくのコースにいた審判コーチが、そういつてにこっとほえんだ。

50秒35！

やったあ！

思わずとびはねてよろこびたいのを、ぐっとがまんした。

まだ平泳ぎのレースはあとふたつのこっていて、すぐそこにきんちょうした顔でスタートを待つ子が待機していたから。

つぎのレースが始まった。

懸命けんめいに泳ぐ子たちはみんな速く思えた。

ぼくはただただ、いのるような気もちでのこのレースを見守った。

そのあと、平泳ぎを泳いだ全員がプールサイドに集められた。

TSS杯に出場できる二名が発表されるのだ。

コーチにいわれた50秒台は出したんだもん。きっとTSS杯に出られる！ぜったいに出たい！

ぎゅっと両手をにぎり合わせて、審判コーチの言葉を待った。

一位いから発表だ。

「二位、47秒58……」

名前をよばれた子が「わあ」と声を上げ、まわりからはくしゅが起こる。

あとひとり……。さらに強く両手をにぎり合わせた。

「二位、49秒36……」

49秒って聞いたしゅんかん、自分じゃないとわかって、むねのドキドキがぴたりと止まった。

「三位、50秒35。桜田蓮」

ぼくの名前がよばれたら、同じスイミングスクールから出場した子がこちらを見て手をたたいてくれた。それでも、TSS杯には出られない。

ぎゅっとにぎりしめていた手をそっと開く。

相かわらずかさついていて、ほんのり塩素えんそのかおりがする。

でもその手は、なんだか前より大きくなったように見えた。

「ざんねだったわね」

ロビーへ行くと、おうえんに来てくれていた母さんがいった。

「うん」

うなずいて、ぼくはさっきもらったばかりの「第三位」と書かれた賞状をもう一度くるくると広げてみた。

三位だったことはやっぱりやさしかった。

結果発表を待つ間、手だけじゃなく奥歯もかみしめていたようで、あごのあたりがまだじんわりいたい。

てのひらでほほをさする。きっと今、ゆがんだ顔をしてるんだろうな。

そう思って、水泳大会で予選落ちした日の凛まりんの顔を思い出した。

凛もゆがんだ顔をしてたよな。

……それって、一生懸命水泳をやってるからだよね。

ああ、それならあのととき、なにかいってあげましてあげればよかったな。

そこで母さんが、「もし蓮に気もちがあるならなんだけど」と前おきして、スマートフォンをこちらへさしだした。

「スイミングによって、選手をえらぶ基準のタイムとか年れいってちがうらしいの。TSSで特訓生になるには低学年のほうが有利みたいだけど、べつのところなら高学年になっても可能性があるそうよ。それなら、可能性が高いスイミングへうつるのはどうかしら？」

母さんの指がスマートフォンの画面をなでると、聞きなれない名前のスイミングのしょうかいがあらわれた。

「ちょっと遠いけど、がんばれば通えると思うの」

住所じゅうしょを見ると、電車で三つ先の駅の名前が書いてある。

母さん、ぼくのためにいろいろ調べてくれてたんだな。^①

B

むねが温あたくなる。そのむねに、ぼくはそっと両手を重ねた。

TSS杯に出場できる目標の二位以内に入るとは、けっきょくできなかった。だからくやしい気もちはもちろんあった。

だけど今日は、特訓生にえらばなかったときとはちょっと気もちがちがっていた。

黒いもやもやがあふれだす代わりに、小さなほのおがともったような、かすかだけど力強い温かさをむねの奥に感じた。母さんの提案はうれしかったけれど、今すぐとびつきたいとは思わなかった。

「考えてみる」

ぼくはそういって、心配そうにこちらを見つめる母さんにうなずいた。

つぎの日の朝、リビングへ行くと見られない額^{がく}がふたつ、壁にならべてかけてあった。その前に立ち、凧がじっと額を見上げている。なんだろう？

後ろからのぞいたら、きのうぼくがもらった三位の賞状だった。

そのとなりは、凧がこの前大会に出たときの参加証だ。

母さんがかざってくれたのだろう。

凧はきゅっと I 元を引きしめて、自分の参加証を見つめている。

……がんばったんだから、くやしいよな。

けどさ……。

凧の肩を、ぼくはぽんっとたたいた。

「またがんばろうぜ」

ふりむいた凧へ、丸めてグーにした手をまっすぐにつきだす。

その手とぼくの顔をこうごに見つめたあと、凧も自分の手をグーにした。

「うん」

凧のグーとぼくのグーがこつんとぶつかった。

朝ごはんをすませると、いつもより早く家を出て、さいごのスイカの練習にむかった。よゆうで八時前に川原運動公園についた。

今日は川原運動公園フェスティバルの日なので、公園の入口にはかんばんが、会場となるテニスコートや体育館の前には案内がはりだされている。もちろん屋内^{やぐち}プールの入口にもはり紙が出ていた。

「十一時から」だれでも百メートルリレー」

一時から「水泳デモンストラーション」

随時、参加・見学できます」

カラフルな文字でそう書いてある。

受付のお姉さんも今日はいつものポロシャツではなく、太陽みたいな明るい黄色のティーシャツすがたでテーブルを外へ運びだしている。その前を横切って、ぼくはランニングコースへむかった。

「やっぱりいた！」

赤いティーシャツに赤い短パン。どこから見てもよく目立つ。

春さんだ。かけだして行って春さんとの差を一气につめると、今日は背中から声をかけた。

「おはようございます」

大きな声にふりむいた春さんは、「ああ、おはようさん」というと、また前をむいてしまう。ぼくはあわててとなりにならんのだ。

「県予選は三位で、TSS杯はだめでした」

まずはきのうの報告をして、それからこうつけたした。

「でもぼく、なんかへんなんです」

「へん？」

それまでまっすぐ前をむいていた春さんがこちらをふりむいた。

「くやしくないわけじゃ、ないんだけど……」

むねを C さすってみせる。

今の気持ちをつまく表す言葉が見つからない。

とりあえず、思いつくまま言葉をつづけた。

「くやしいけど、思ったより落ちこんでないっていうか……」

春さんの手がのびてきて、ぼくのむねを D たいた。

「そう思う理由は、ちゃんとそこにあるんだよ」

それから意味ありげににとわらった。

「物事は、そんなに単純じゃないからね」

「そっか……」

陽太はうつむいた。

「そんなあ……」

海音の目には E なみだがふくらんできて、すーっと丸いほをつたっていく。ストレッチの前に、県予選で三位だったことを話した。するとふたりは、すっかりがっかりしてしまった。こんなこというのはふきんしんだけど、ぼくはそんなふたりを見てむねが温くなった。

「じゃあ、今度はあたしから報告だ」

しずんだ空気に、春さんのしゃがれ声がわりこんだ。

「あたしは九月から四国へ行くことにした」

この前のマスターズの大会で再会した仲間に、高校の水泳部の顧問をたのまれて、引きうけたそうさ。

「長いこと水泳を教えてきて、春で一区切りつけたんだけどね。あんたたちを見てたらさ」

春さんはぼくらをゆっくりと見まわした。

^③ その目は、今まで見た中で一番強く、ギラリとかがやいていた。

「おれも、明日引っこすんだ」

陽太が口を開くと、

「みんな、おわかれか……」

海音がぐすっとはなをすすった。

同じ市内とはいえ、海音とも家はだいぶはなれている。今までのように会うことはないだろう。スイカが今日でさいごなことは、前からわかっていた。

だけどむねが F なる。やっぱりさみしい。

夏の終わりをおしむように、ミーンミーンとセミが^④せわしなく鳴いている。

初めてここへ来たときは、まだセミなんか鳴いてなかったのに。

あれから二か月。

「いろいろあったなあ」

スイカに入って陽太や海音と友だちになったり、春さんにいろいろ教わったり、TSS杯にむけてがんばって練習したり。もやもやした気もちをふりはらいたくて通いだしたけど、今は充^{じゅうじつ}実感でいっぱいだ。

そこでぼくは、はっとした。

こんな気もちになれたのって、特訓生になれなかったおかげなんだよな。

春さんと父さん^{*}の顔がいっぺんに頭にうかんで、ぶつかって、はじけた。

そっか！

物事はそんなに単純じゃないって、がんばった結果はそれだけじゃないって、そういうことだったんだ！

……ああ、ぼくのがんばりはむだじゃなかった。

父さんや春さんが気づいたことって、きっとそれなんだ。それで気もちを切りかえられたんだ。

たぶん今、ぼくもふたりのようなすっきりさっぱりした顔をしているのだろう。心配してくれてた母さんにも、^⑤ぼくが気づいたことを話してみよう。

陽太と海音はまだがっくりと

Ⅱ

を落としている。

本当はがっかりする必要なんてないのに。

わかれの前に、それをみんなにも感じ^{かん}てほしい。

そう思って、ぼくはすてきなアイデアを思いついた。

「ねえ、みんなで泳ごうよ！」

宇佐美牧子『まだまだここから』より

* 春さん……高校時代インターハイ三位の実績の持ち主だが、大学生のときに練習のしすぎでがをしまい、以前と同じようには泳げなくなって引退

した。現在は水泳の指導者をしながら、現役のスイマーとしてマスターズの水泳大会（十八歳以上が対象の水泳大会）にも出ている。

* 凜……「ぼく」の弟。

* 父さん……つとめていた自動車会社の支店がつぶれてしまい、今は、同じ会社のべつの支店ではたらいっている。支店がつぶれたときにはショックを受けていたが、今は「新しいことに気づいた」と「ぼく」に語り、すっきりさっぱりした顔をしている。

問一 — A 〰 F に最も適するものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア きゅっと イ ぶわっと ウ がさがさと エ こくりと オ とんっと カ ふわっと

問二 — I ・ II に最も適する、体の一部を表す語を I は漢字一字で、II はひらがな二字で答えなさい。

問三 — 部①「いろいろ調べてくれた」とありますが、「母さん」が「ぼく」のために調べてくれたことはどのようなことですか、次の中からあてはまらないものを選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」が知らないスイミングスクール

イ TSSよりも通いやすいスイミングスクール

ウ スクールによって特訓生を選ぶ基準が違うこと

エ 「ぼく」が特訓生になれる可能性が高いスクール

問四 — 部②「ふきんしん」、④「せわしなく」のここでの意味として、最も適するものを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

② 「ふきんしん」

ア 意地悪
イ 無用心
ウ ぶざま
エ 無神経

④ 「せわしなく」

ア 大音量で
イ 放置されたままで
ウ 絶え間なく
エ 不親切にも

問五 — 部③「その目は、今まで見た中で一番強く、ギラリとかがやいていた」とありますが、春さんのどのような気持ちが読み取れますか。自分の言葉で分かりやすく説明しなさい。

問六 — 部⑤「ぼくが気づいたこと」とは、どのようなことだと考えられますか、文章中の言葉を使いながら分かりやすく説明しなさい。

二 二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「なぜ、植物は、動きまわれるように進化しなかったのですか」と聞かれることがあります。でも、もし植物たちが、自分たちについて、このような疑問をもたれていると知ったなら、^①たいへん残念な思いをするでしょう。

たしかに、毎日の生活で、動物が動きまわるのに対し、植物たちは動きまわりません。また、植物たちは、発芽した場所から動きまわることなく、生涯を終えます。^{しょうがい}
[A]、私たちは、「動物は動きまわることでできるけれども、植物は動きまわることができない」と表現することもあります。

「なぜ、植物は、動きまわれるように進化しなかったのですか」との疑問や「植物は動きまわることができない」との表現の裏には、「動きまわられる動物が、動きまわれない植物より、すぐれた生きものである」という意識があるように思われます。

[B]、植物たちは、「動物のように、動きまわりたい」と思っているのでしょうか。もし、ほんとうに、そのように思っているのに、動きまわることができないのなら、植物たちは、かわいそうな生きものということになります。

しかし、植物たちが自分の気持ちを語ることができたら、「植物たちが『動きまわりたい』と思っているというのは、とんでもない誤解です。私たちは、『動きまわりたい』と思っていません」と言うでしょう。

それどころか、植物たちは、「『動きまわることができない』のではなく、『動きまわる必要がない』のです」と言うはずです。植物たちがそのように言えば、^ま間違いなく、反論があるでしょう。

「植物たちは、もともと手も足もなく、根を土の中に生やしており、実際に動きまわろうとしても、動きまわることはできない。だから、『動きまわる必要がない』というのは、動きまわることができない植物たちの側に立った負け惜しみだ」というものです。

ところが、「ほんとうに植物たちが『動きまわる必要がない』のか、[C]、『動きまわることができない』のか」は、意外とわかりやすく吟味し、^{ぎんみ}検証することができます。なぜなら、動物は意味もなくウロウロと動きまわるのではないからです。

「なぜ、動物が動きまわるのか」と理由を考え、そのそれぞれの局面で、「植物たちは、どうしているか」を考えてみてください。そうすれば、「動きまわることができないために、植物たちは、不自由な生活を強いられている」のか、あるいは、「植物たちは、ほんとうに動きまわる必要がない」のかが見えてきます。ですから、^②まず、動物がウロウロと動きまわる理由を考えましょう。

動物が動きまわるもっとも大切な理由の一つは、「自分が生きるために、食べものを得るため」です。日々の生命活動を営んで、命を保ち、成長していくためには、栄養とエネルギーが必要です。

そのため、私たち人間を含め、動物は食べものを食べることで、命を保ち、成長するための栄養とエネルギーを得ています。植物たちも動物と同じように、生命活動を行い、成長していくには、栄養とエネルギーが必要です。

(中略)

植物たちが食べものを食べる姿を見せないために、「植物たちは、食べものを食べたくないのか」との疑問を抱か^{いだ}れることがあります。しかし、これは、まったく的外れのもので。植物たちが食べものを食べる姿を見せないのも、植物たちが食べものを求めて動きまわらないのも、植物たちは、葉っぱで自分の食べものをつくることのできるからなのです。

植物たちは、根から吸った「水」と、葉っぱが吸収する「二酸化炭素」を材料にして、太陽の「光」を使って、自分の力で、食べものをつくります。この反応は、「光合成」といわれます。この反応により、植物たちは、生命活動を行い、成長していくためのエネルギーのもとになるデンプンをつくりだしているのです。

デンプンは、私たち人間が主食としている、お米、コムギ、トウモロコシの主な成分です。植物たちは、それを自分でつくるのですから、食べものを食べる必要はありません。また、食べものを探し求めてウロウロと動きまわる必要がありません。

植物たちには、「自分の食べものは、人の世話になりたくない」という思いがあるのでしょうか。そして、実際に、食べものを自分でつくりだす力があるのです。だからこそ、芽生えた場所から、移動することなく、生涯を過ごすことができるのです。

植物たちは、食べものを探し求めて動きまわる動物を見て、「動きまわらなければ食べものにありつけない、かわいそうな生き物だ」と思っているかもしれません。大げさに言えば、植物たちは、動物を憐れ^{あは}れているということになります。

植物たちは、自分たちの食べものをつくるだけではありません。私たちが毎日食べるお米や、野菜、くだものなどは、植物が光合成でつくるものです。もちろん、私たちはお肉も食べますが、「そのお肉が、どのようにしてできたのか」をたどっていくと、植物たちが光合成でつくったものに行きつきます。

私たち人間だけではありません。地球上のすべての動物は、植物たちが光合成でつくるものを食べて生きています。植物たちは、地球上のすべての動物の食糧^{しきりょう}を賄^{まか}っているのです。

光合成に必要な、水や二酸化炭素、太陽の光は、地球上にいくらでもあります。そして、とくにお金はかからず、安全なものばかりです。もし私たちが、工場に機械を並べて光合成をすることができれば、世界中の人々が食べものの不足に悩^{なや}むことはないでしょう。

私たち人間の科学は、すぐく進歩しています。だから、「小さな葉っぱがすることぐらい、真似^{まね}できる」と思われがちです。ところが、私たちは、光合成を真似^{まね}することはできません。^④ 私たち人間の科学は、たった一枚の小さな葉っぱにも及^{およ}んでいないのです。

植物たちも、そんなに簡単に、光合成をしているわけではありません。光合成をするためには、その材料として、水と二酸化炭素が必要です。そして、反応のエネルギーとして、光が必要です。

植物たちは、動きまわることなく、自給自足で、これらを調達して、やり遂^とげなければなりません。そのための、植物たちの思いと努力は、生半可^{なまはんか}なものではないでしょう。^⑤ 「自分の食べものは、自分でつくる」という強い思いをもっていなければなりません。

植物たちは、光合成に必要な光を受けようとして、背丈^{せたい}を伸ばし、葉っぱの向きを変えます。また、光合成に必要な水を集めるために、根を伸ばし、水を葉っぱに運びます。空气中に存在する二酸化炭素を葉っぱに吸収しなければなりません。

植物たちは、「自分の食べものは、人の世話になりたくない」という強い気持ちで、その思いを遂げるための努力をしているのです。

田中修『植物たちに心はあるのか』より

問一 文中の

A

、

C

 に当てはまる語として最も適するものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア たとえば イ あるいは ウ そのため エ でも

問二 — 部①「たいへん残念な思いをするでしょう」とありますが、筆者がそのように想像する理由として最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 植物たちは、「動きまわりたい」と思っているのに、発芽した場所から動きまわることなく生涯を終えるから。

イ 植物たちは、自分たちについてもたれている疑問は誤解をもとにしていると言いたいだろうから。

ウ 植物たちは、自分の気持ちを語ることができたとしても、負け惜しみをいうほかないから。

エ 植物たちは、植物が動物よりすぐれた生きものであると思っているだろうから。

問三 — 部②「まず、動物がウロウロと動きまわる理由を考えましょう」とありますが、筆者がそう述べるのはなぜですか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 植物ではなく、まずは動物が「動きまわりたい」と思っているのかどうかを明らかにする必要があるから。

イ 植物についてよりも、動物についてのほうが、意外とわかりやすく吟味し、検証することができるから。

ウ 植物のことを知るうえで、動物が動きまわる理由や意味を考えることが手がかりになるから。

エ 植物が光合成でつくるものを、地球上のすべての動物が食べて生きているから。

問四 — 部③「植物たちは、動物を憐れんでいる」とありますが、そうだとすればそれはなぜですか。「植物たちは、」に続くように、植物と動物を比べて説明しなさい。

問五 — 部④「私たち人間の科学は、たった一枚の小さな葉っぱにも及んでいないのです」とありますが、どのような点について筆者はそう述べていますか。最も適するものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 私たち人間が、「植物たちは、食べものを食べたくなかないのか」という的外れな疑問を抱く、という点。

イ 植物たちは、芽生えた場所から、移動することなく、生涯を過ごすことができる、という点。

ウ 私たち人間が、科学によって植物のように光合成をすることはできない、という点。

エ 植物たちは、地球上のすべての動物の食糧を賄っている、という点。

問六 — 部⑤「自分の食べもの」とありますが、ここでそれは具体的に何のことですか。本文中の言葉で答えなさい。

問七 本文について説明したものとして適さないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 植物を、まるで人のように心をもち、思いをめぐらしたり努力したりするかのように表現しているところがある。

イ 疑問について、それに対する答えを解き明かしていくように書き進められている。

ウ 植物について探るために、人間をはじめとした動物と植物を比べながら説明しているところがある。

エ 文章のはじめに結論を述べ、その後、その結論にたどり着いた理由を並べている。

三 次のことわざに適する語を後から選び、それぞれ記号で答えなさい。

1 □に鶯うぐいす

2 □に風

3 桃栗三年□八年ももくり

4 □の太木

5 立てば芍薬座しゃくやくれば□

ア 菊きく イ 牡丹ぼたん

ウ 柳やなぎ

エ 梅うめ

オ うど

カ 柿かき

四 次の――部のカタカナを漢字に直しなさい。

1 自|分の立|場をジカクする。

2 コ|ンナ|ンに立|ち向|かう。

3 荷|物をユウソウする。

4 図|書館で本を力|りる。

5 お年玉をチョキンする。

